

- ◎家畜伝染病の防疫対策にしっかりと取り組もう。**
◎公共牧場の有効活用と自給飼料の安定確保を進めよう。

乳用牛

◇ 周産期病を防ぐ飼育管理

(1) 飼育環境

ア 泌乳期から乾乳期へ移行する際は環境の急変を避ける。また、乾乳期中は自由運動や日光浴ができる環境で飼育し、牛にストレスを与えない。

(2) 飼料給与

ア 乾乳前期は、第1胃の機能を維持するために濃厚飼料を1～2kg/日程度と、粗飼料を十分に与える。

イ 乾乳後期は、分娩予定日の3週間程度前から濃厚飼料4kg/日を上限として徐々に増やす。粗飼料は良質なものを十分に与える。

ウ 分娩後は、乾乳後期の飼料の急変を避け、濃厚飼料は粗飼料の食い込みを確認しながら徐々に増やす。また、乾物摂取量の低下を招かないためにも、粗飼料は最も良質なものを与える。

(3) ボディコンディションスコア（BCS）及び体重

ア 泌乳後期はBCSを3.25前後で維持するように努め、BCS3.75以上の過肥にしない。

イ 乾乳期中は母体の維持と胎児の発育のため、体重の増減がないよう適正な飼料給与に努める。

肉用牛

1 放牧牛の管理

(1) 放牧馴致を行うとともに、放牧に慣れていない牛は、肢蹄の病気やけがに注意する。子牛は下痢や肺炎で急激に衰弱するため、早期発見や早期治療に努める。

(2) 初めて放牧する牛（子牛や外部導入牛）は、ピロプラズマ病に抵抗性がないので注意する。また、ピロプラズマ病はダニが伝播する病気なので、定期的に外部寄生虫駆除剤を使用する。

(3) 青草のみでは塩分やミネラルが不足し、栄養バランスが崩れるので、これらの不足を補うため、水飲み場などに鉱塩を置く。

2 子牛放牧

- (1) 放牧子牛は、舎飼子牛に比べて運動量が多いため、肢蹄が鍛えられ、丈夫で健康に育つ。
- (2) 畜産研究所の試験結果によると、100日程度放牧した子牛は、その後の増体に優れ、肥育終了時には舎飼牛と差のない成績が得られている。このため、子牛の積極的な放牧に努める。
- (3) 草丈20～30cm位で放牧を開始し、滞牧日数は長くても1週間以内とする。

豚

◇ 繁殖豚の飼育管理

(1) 育成期間

- ア 体重約60kgから母豚候補として育成を開始し、可能であればパドックでの運動により肢蹄を強化する。
- イ 分娩後に備え、授乳期間中の飼料の増給に対応できるように育成を行うが、過肥に注意する。また、群飼では、豚の強弱による食いムラで過肥や発育不良が出るため、頭数に見合った給餌スペース確保と不断給餌が理想である。

(2) 交配前後

- ア 未経産豚への交配は、2回目以降の発情で生後8か月齢、体重130kgを目安とする。
- イ 経産豚については、離乳当日は2kg程度を給餌し、その後、授乳中の体力消耗程度に応じた飼料増給を発情回帰まで行う。ただし、発情回帰が遅れている豚は過肥に注意し減給する。
- ウ 交配後4日間は、受精卵の損耗を防ぐために減給する。

(3) 妊娠期間

- ア 連産性を高めるため、ボディコンディションスコアに注意する。初産から3産目の豚では痩せすぎに、4産目以降の豚では過肥に気を付けて栄養管理を行う。
- イ 基準体重に満たない初産豚や、体力が回復しない経産豚には妊娠前期に増給が必要となるが、過度な給与はしない。
- ウ 離乳時にやせすぎた豚には、妊娠中期から後期に多給し、目標とする分娩時体重を目指す。

(4) 授乳期間

- エネルギー含量の高い授乳期用飼料を自由に摂取させ、離乳時の体重減少量を7kg程度にとどめることにより、次回の発情回帰の遅延を防ぐ。

鶏

1 青森シャモロックの飼料給与

- (1) 餌付けから27日齢までのひなには、初期発育を早め肉付きを良くするため、青森シャモロック用前期飼料、又は、下表に示すタンパクやエネルギーレベルの肉用鶏専用配

合飼料を給与する。

- (2) 28日齢以降は、過剰な脂肪付着を防ぐため、青森シャモロック用後期用飼料又は、下表に示すタンパクやエネルギーレベルの肉用鶏専用配合飼料を給与する。
- (3) 出荷2週間前（雌雄同群飼いの場合は85日齢以降）からは、ニンニク粉末を0.3%添加する。

表 青森シャモロックの飼料給与法

給与期間	給与飼料
餌付け～27日齢	肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの） タンパク質20%以上、代謝エネルギー3,000kcal以上の
28日齢～出荷	肉用鶏専用配合飼料（抗菌性飼料添加物を含まないもの） タンパク質16%以上、代謝エネルギー2,900kcal以上の
出荷前2週間	ニンニク粉末*を0.3%添加

※商品名「フジガーリックA」

2 青森シャモロックの衛生管理

- (1) 青森シャモロックの衛生対策は、「飼育管理マニュアル（平成23年5月版）」や農林水産省の「飼養衛生管理基準」に沿って実施するとともに、特に伝染性疾病予防のため次のことに心掛ける。
 - ア 部外者や車両の農場立入りは原則として禁止し、車両等の出入りが必要な場合には消毒の徹底に努める。
 - イ 病気を鶏舎内に持ち込まないようにするために、鶏舎出入口に踏込み消毒槽を設置し、消毒の徹底を図るとともに、鶏舎ごとに専用の作業衣・作業靴等を着用する。
 - ウ 鶏舎への野生動物の進入防止に努め、特に、その排せつ物等が飼料や飲水に混入しないようにする。
 - エ 異常鶏の早期発見に努めるとともに、異常鶏を発見した場合は、速やかに家畜保健衛生所に連絡し指導を受ける。

草地・飼料作物

1 良質粗飼料の調製

- (1) 牧草の刈取は出穂始期から出穂期に行い、遅くとも開花始期までに終える。
- (2) ロールベールサイレージを調製する場合は、原料草水分が50～60%の状態に梱包し、その日のうちに密封する。ストレッチフィルムは通常の場合、2回転巻き（4層）とするが、3か月以上貯蔵を行う場合は3回転巻き（6層）にして気密性の保持に努める。
- (3) 乾草調製は4～5日間の連続した晴天日が見込める場合に実施し、気象情報に十分注意しながら雨が予想される場合は、早めにサイレージ調製に切り替える。
- (4) ロールベール乾草は水分が高いと貯蔵中の発熱やカビの発生により品質の低下を招くほか、極端な場合は発火することもあるので、水分20%以下で梱包する。やむを得ず水分が高い状態で梱包した場合は、速やかにストレッチフィルムで密封して発熱やカビの発生を防ぐ。

2 1 番草収穫後の追肥及び牛尿の利用

- (1) 収穫後は速やかに追肥を行い、2番草の再生を促して収量の確保に努める。
- (2) 窒素施肥量は、オーチャードグラス主体経年草地で10アール当たり5～6kg、利用初年目草地やチモシー主体草地では3～4kgとする。
- (3) 草地飼料作物への牛尿の利用

ア 牛尿中の肥料成分の把握

牛尿に含まれるカリ及び窒素の化学肥料代替量は、電気伝導度値（EC）を測定することにより、表1のとおり推定できるので、施肥基準に応じた牛尿施用量を設定する。

表1 電気伝導度値（EC）による牛尿現物1t（1m³）中の化学肥料代替量（kg）推定値

成分	EC（mS/cm、25℃補正值）									
	5	10	15	20	25	30	35	40	45	50
窒素	0.27	0.43	0.65	0.95	1.31	1.74	2.25	2.82	3.47	4.18
カリ	1.11	1.73	2.34	2.96	3.58	4.20	4.81	5.43	6.05	6.67

イ 草地に対する施用法

草地へのカリ施肥量は窒素量の2/3を基準としているが、牛尿は窒素よりカリを多く含むので、牛尿の施用はカリ成分基準施用量を満たす量にとどめ、不足する窒素及びリン酸成分は単肥やNP肥料を用いて補給し、成分のバランスを保つ。

ウ サイレージ用とうもろこしに対する施用法

窒素成分で10kg/10a相当を上限として全面散布する。カリは無施用とし、リン酸は基準量を施用する。

3 サイレージ用とうもろこし畑の雑草防除

農作物病害虫防除指針に基づき、優占雑草の種類に応じて表2と表3に示す除草剤により雑草防除を行う。

表2 サイレージ用とうもろこしの土壌処理除草剤の使用法

薬 剤 名	使 用 量	主要な対象雑草
ゲザ [®] プリムフロアブル	100～200mL/10a	1年生広葉雑草
ゴ [®] コーサン乳剤	200～300mL/10a	1年生雑草全般
ラッ [®] 乳剤	300mL/10a	1年生イネ科雑草
ゲザ [®] ソフロアブル	300mL/10a	1年生雑草全般
ゲザ [®] ソコ [®] ルト [®]	140～260mL/10a	1年生雑草全般
デュ [®] アル乳剤	300mL/10a	1年生イネ科雑草
デュ [®] アルコ [®] ルト [®]	70～130mL/10a	1年生イネ科雑草
エコト [®] ップ乳剤	500～600mL/10a	1年生雑草全般
ラク [®] サ [®] 乳剤	400～600mL/10a	1年生雑草
クリア [®] タン乳剤	500～800mL/10a	1年生雑草全般
モ [®] ティ [®] ブ乳剤	200～400mL/10a	1年生雑草全般
ボ [®] ク [®] サ [®]	400～500mL/10a	1年生雑草全般

注) いずれも使用時期は播種後出芽前（雑草発生前）である。

表3 サイレージ用とうもろこしの生育期雑草処理用除草剤の使用法

薬 剤 名	使 用 量	主要な対象雑草	使用時期
ゲザブ [®] リムフロアブル	100～200mL/10a	1年生広葉雑草	とうもろこし2～4葉期
ゲザ [®] ノンフロアブル	300mL/10a	1年生雑草全般	とうもろこし2～4葉期
ワホーブ [®] 乳剤	100～150mL/10a	1年生イネ科雑草	とうもろこし3～5葉期
バサゲ [®] ラン液剤 (ナトリウム塩)	100～150mL/10a	1年生雑草全般 (ただしイネ科を除く)	とうもろこしの生育期 (雑草の3～6葉期)
ハーモニー75DF水溶剤	2g/10a	ギシギシ類	とうもろこし2～4葉期
シャドー水和剤	50～75g/10a	イチビ	イチビ2～5葉期 (とうもろこし3～5葉期)
ベルベ [®] カット	5～10mL/10a(イチビ [®] 3～5葉期)、 10mL/10a(イチビ [®] 5～8葉期)	イチビ	イチビ3～8葉期 (とうもろこし4葉期以降)

注1) ゲザ[®]ノンフロアブル(ゲザ[®]ノンコート[®])またはゲザブ[®]リムフロアブルを土壌処理剤として使用した場合は、生育期処理剤としては使用できない。

注2) テュアル[®]乳剤(テュアルコート[®])とゲザ[®]ノンフロアブルを組み合わせた体系処理は避ける。

※ 農薬使用の際は必ず最新の「農薬登録」を確認すること！